

新潟教育研究所

令和4年12月8日発行 第51号

公益財団法人 新潟教育会
新潟教育研究所

T951-8104

新潟市中央区西大畑町590-3 新潟教育会館
URL <http://kyouikukai.jp>

TEL・FAX 025-222-2971

E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

自分らしく 精一杯生きることを教えて!

新潟県立大学 非常勤講師

梅津 玲子



「発達課題で青年期の男性・女性の社会的役割を果たすというところに違和感があります。」と一人の学生がコメントシートに書いてきました(『教職の意義』9回目講義)。その学生は資料にあるアメリカの教育学者ハヴィガーストが示した青年期の男女役割の記述について疑問を投げかけてきたのです。次の講義冒頭でみんなと話しました。学生たちからは「男女平等」「LGBTQの理解」等の意識が浸透し、「自分らしく生きたい」と願っていることが伝わってきました。今までの学校教育の成果であると実感。しかし、日本の社会はというと、現在はまだまだ男女格差は先進国では最下位、中国や韓国よりも下位というのが現状です。学生たちには講義を通して諦めずに粛々と無意識のジェンダー・バイアスの克服を説いていかなければならないと考えています。

30年ほど前になりますが、社会教育主事資格を持つ私は40代で県の生涯学習行政に携わる機会をもらいました。言わずもがな、女性教育・家庭教育の担当。同一労働・同一賃金の学校で働いていた私ですから、男女不平等などとは思いませんでした。当たり前だと思っていたことが実は違っていることに衝撃を受け、担当の『ウーマン・カレッジ』『女性リーダー研修』等の事業を実施しながら、自らの意識改革にチャレンジしてきました。国立女性教育会館ヌエックに何度も足を運びながら研修、自分自身が少しずつ変わっていくことを感じていました。しかし、現実には厳しいもの

がありました。

その後、女性登用という風になり、教頭として学校現場へ。児童に「女なのにどうして教頭先生なの?」、男児には「ぼくたちは男の子だよ、さんと呼ばれるのは気持ち悪いよ」などと言われました。男女別名簿、別呼称、体育着・学習用具の色分け、らしさの強要等々、改善すべきことはたくさんありました。反発は勿論です。衝撃は議員学校訪問時、「この学校は教頭が女だからアンテナ高くして見ていたんだ」と言われたこと。善意とは受け取れない発言。女性と言うことでの風当たりは想像以上に厳しいものでした。その後、異動で再び県へ。男女平等教育の手引き書作成が高等学校から始まりました。そして、2年後、某市の生涯学習課長として、単身赴任。初の女性課長と言われ……。議会では毎回質問が出て、答弁に立ち。なぜ?女性だから?いくら誠意を尽くしてもかなわないことがあることを知りました。その後は、学校でも行政でも私なりに信念は曲げず、急がず・焦らず、淡々と歩んできました。

そして今、学校は混合名簿、呼称は「～さん」、ランドセルは好きな色等が当たり前になってきています。しかし、まだまだ課題山積。大人の意識を変えることは難しく、だからこそ、学校教育の力が重要であると考えています。社会的・文化的に作られた性差を払拭し、自分らしく、精一杯生き抜くことを教えてほしい、そして、男女格差ワースト1からの脱却を心から願っています。

どの子ども魅力ある活動を求めている ～特別支援教育の視点も加味して～

新潟教育研究所 教育アドバイザー

長谷川 清



はじめに

「みんな違ってみんないい」退職後に訪問した教室に掲げてあった学級目標に目が留まる。様々な生きづらさを抱え学ぼうとしている子どもが多く顕在する教室にあり、個の学びや育ちを丁寧に見ていく特別支援教育の考え方も大切に、子どもの違いをそれぞれの特性やよさとしてとらえていく子ども理解の姿勢を大事にしたい。そして、より豊かに一人一人の子どもを語りたいと願う教師を応援していきたい。

子ども理解と3つの視点

子ども理解は、教師がとらえた子どもの事実とその解釈を基盤とする。子どもの事実をいかに多様な活動場面から見つけているか。学習活動がマンネリ化したなかで子どもを語っていないか。子ども自身が取り組む姿をより多面的に求めていくためには、多様な活動の場を用意したい。その活動づくりと子どもを見ていくための視点を3つ示す。

まず、特別支援教育の観点から2つ示す。

- ① 「聞く、読む、話す、書く」という言語活動を学びの手段から文字言語と音声言語ととらえることで見えてくるものがある。そして、学びの過程から情報の入力と出力の関係に分けてみたり、中間に「まとめる、つなげるなどの処理」を位置づけ、入力～処理～出力と、学びの過程を丁寧にみたりする視点をもちたい。このことから、個々の学びの得意、不得意などの特性に目を向けることができる。
- ② 特別支援教育の中核的要素に「自立活動」がある。「心理的安定」「人間関係の形成」など6区分27項目が示されている。教室にいるどんな子どもに対しても、学ぶことを基礎支えし、自立した学びを成立させるために不可欠な視点である。気になる子について、学校生活の様々な場面をこの視点で見直すことで、教育的ニーズ

に気づき、支援の方向が見えてくる。

もう一つは、何より各教科指導の基盤である学習活動を充実させることである。一人一人の子どもが学習活動を通して、何にどのように取り組み、できるようになってきているのかを認めていく日々の営みを大切にするのである。

- ③ 各教科の指導は子どもが主体的に取り組む学習活動を通して「見方・考え方」を育てることとしている。3年生社会科では、買い物調べの結果を、地図やグラフに整理する。この活動は、分布や量的比較など社会的な見方を育てていく。こうした学習活動を意図的に提示し、その活動を個の学びとしてとらえ、その子のものの見方や考え方の育ちにこそ目を向けてくことを大切にしたい。

子どもの願いに寄り添う評価

子どもの得意なこと苦手なことは様々である。どの子ども自分のもてる力を精一杯発揮し伸びていくことに教師は全力を注がなければならない。活動を推進していく力の源は子どもの中にあり、一律ではない。だからこそ「もっとやりたい」「次はこうしたい」また「できるように助けてほしい」という子どもの願いに寄り添いたい。仲間と共にこうした学びを進める子どもの姿に目を注ぎ、「いいね!」と認めていく。認め、価値付ける教師の働きが、子どもの自信となり、自己理解を深める。子ども同士の相互理解も深まり、好循環が生まれる。教師がもつ尺度のみで評価する減点的な見方から、子ども自身の教育的ニーズに迫る加点的な見方を大事にしたい。

おわりに

教室で苦戦する子どもについて、その理解や授業づくりについて、一緒に考える機会をいただいていた。子どもが自らの教育的ニーズとして求めている学習活動にこそ目を向けることの大切さを強く感じている。

願う姿 ジレンマの姿 私の姿

新潟教育研究所 研究員

宮川由美子



はじめに

あるドラッグストアで、細々とした日用品をカゴ一杯にしてレジに並んだ。後ろにコーヒー牛乳のペットボトル一本を持った人。順番を代わろうかなと一瞬思った。割引券やポイント等少々手間取った。突然「何もたまたしてるんだー！」と大音響が店中に響き渡った。すぐさま店の人が他のレジを開けて声がけをしたのに、何故か後ろのその人は動かずに怒鳴り続けた。

1 ほとぼしるエネルギー

就学時健康診断の保護者対象への「講話」を依頼され、毎年幾つかの学校に何う。その折の話の内容に「中国の子どもたち」の様子を加えている。現役時代、中国の学校を訪問する機会があった。私たちが何者か、子どもたちは興味津々。そして、どの授業も私たちが参観しているからといって臆することはない。通訳の人を通して、勉強や遊びに関することを尋ねると我先にと関わってきてくれた。給食の様子も参観した。山のような盛り付けが、みるみるうちに減っていく。子どもたちのキラキラ輝く瞳に、ぐいぐいと引きつけられている自分がいた。

四国で自給自足生活している家族の様子をテレビで目にした。小学生の手際のよい薪割りや風呂の焚き付け、田んぼの畦道を裸足で走り回る子どもたち。栗のいがを長靴で上手にむく姿。子どもたちの遊びの対象は蛙や蛇や周囲の里山。

「親のエゴ」だと父親は言った。「将来、有名塾へ通える都会の方がよかったと言われるかも。」とも呟いた。こう言える親って凄い。

2 熱血先生受難

「行き過ぎた指導か」連日のようにマスコミを賑わす。厳しい指導のどこまでが世間の理解を得るのか、その線引きが難しい。

本当にその子のことを考えての厳しい指導は、私たちの時代は当たり前であり、世間は受けいれ

てくれた。子どもと教師の間には、それが当たり前前である何かが行き交っていた。子どもの信頼感だったのか、教師の情熱だったのか。

子どもの時に厳しく指導されたことが、「あの時の先生は〇〇〇を分かって欲しかったんだ…」と大人になってから理解することもある。

今、子どもたちが苦境に陥ると、すぐさま救いの手が差し伸べられる。ともすると、苦境以前に石ころや水たまりが取り除かれる。

そうじゃないんだ、自分で何とかしようとする力が必要なんだ、その力を付けたいんだと汗を流している先生方が正しく評価されてほしい。

3 喉元過ぎれば

夏の間の冷たいものの摂り過ぎか、友人とのランチで奮発した豪華刺身御膳のせいかな。休日の夕方、突如、激しい吐き気と頭痛におそわれた。時が時なだけに、体温だけは冷や汗を流しながら、何度も何度も検温した。ベッドでうなりながら「何もいらぬ～。この苦しさを何とかして～。」と思い続けた。翌朝も結局は起き上がれず、仕事を休ませてもらい、老母が炊いたお粥もお椀に半分ほどがやっと。「健康一番」と友人知人に言っていることを身をもって知る出来事となった。が、減った体重が元に戻るにつれ、「あの靴、どうしようかな～欲しいなあ～」とか「ちょっと高いけど、この乳液お肌に良さそう」などと煩惱が渦巻くのである。

おわりに

私は、基本、性善説派である。でも、ドラッグストアの出来事をはじめ、世の中???ということが多すぎる。皆、イライラしている。週に一回非常勤講師として通う大学。駐車場の誘導をしている係の人は、行き帰りの車中の私に、非常に丁寧に頭を下げてくれる。私も必ず丁寧に礼を返す。言葉を交わしたことは一度もない。こんな些細なことに救われている自分がいる。

第14回教師力アップ講座

期日 令和4年7月16日(日)

会場 新潟教育会館

～受講者の声から～

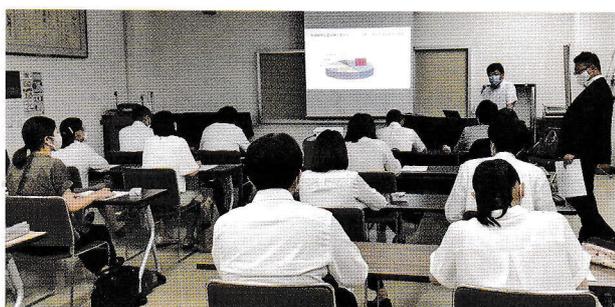


第1講座

「保護者との良好な関係を築く
教師のかかわり方」
～理論と演習を通して～

講師 長岡市立青葉台小学校 校長
古田島 真樹 様

アシスタント 新発田市立東小学校 教諭
中島 崇 様



- ◆ 今、自分が一番悩んでいるテーマで困り感にびつたりの内容だった。自分の保護者対応を振り返り、対応の方向性と明日からのエネルギーを得た。「子どもを育む」という同じ目標を大事にしたい。
- ◆ 保護者の思いばかりが気になり、ともすると子どもを置き去りにしてしまいがち。唯一一致する「子どもを育む」を外さないようにしたい。
- ◆ 対面の研修でないと経験できないことが多くあり、大変勉強になった。また、未来の若い先生方の考え方を知る機会にもなった。
- ◆ レジユメがとにかく分かりやすかった。校内研修でもこのようなご指導の機会があるとよい。

第2講座

「GIGA時代に求められる学びとこれから」

講師 新潟大学教職支援センター 特任教授
高橋 恒彦 様

講師 新潟市立上所小学校 教諭
五十嵐 健太 様

- ◆ 学びは、今、どこに向かっているのかが大切だと改めて気付いた。また、学力調査やこれからの授業を五十嵐先生の講義で学んだ。自分自身をブラッシュアップすることができた。
- ◆ 「令和の教育」で意識することや大切なことが分かった。授業モデルを動画で見ることができ、イメージを持つことができた。
- ◆ ギガ時代に求められる学びとこれからの学びについて、理論的実践的に学びを深めることができた。
- ◆ 私たち学生もICTについて強いようで弱く感じていたが、改めて実感した。「子どもたちを真ん中においたICT授業動画を視聴し、時代の変化を目の当たりにした。今後の学びにつなげたい。



教育アドバイザーリストについて

今年度、新たに教育アドバイザーとして登録いただいた18名の皆さんへの「教育アドバイザー説明会」を、10月15日(土)に実施しました。皆さんのこれまで培われたお力を情報交換し、今後のアドバイザー活動の充実が予想されるひとときとなりました。この18名を含め、計122名のアドバイザーの皆さんが、様々な面から教育現場のお手伝いをさせていただきます。

なお、昨年度から「個人情報保護」のため、教育アドバイザーの住所と電話番号をリストから削除しております。活用につきましては、お気軽に新潟教育会館にお問い合わせください。また、リモートによる教育アドバイザーの活用もスタートしていますので、こちらも、お気軽にお問い合わせください。